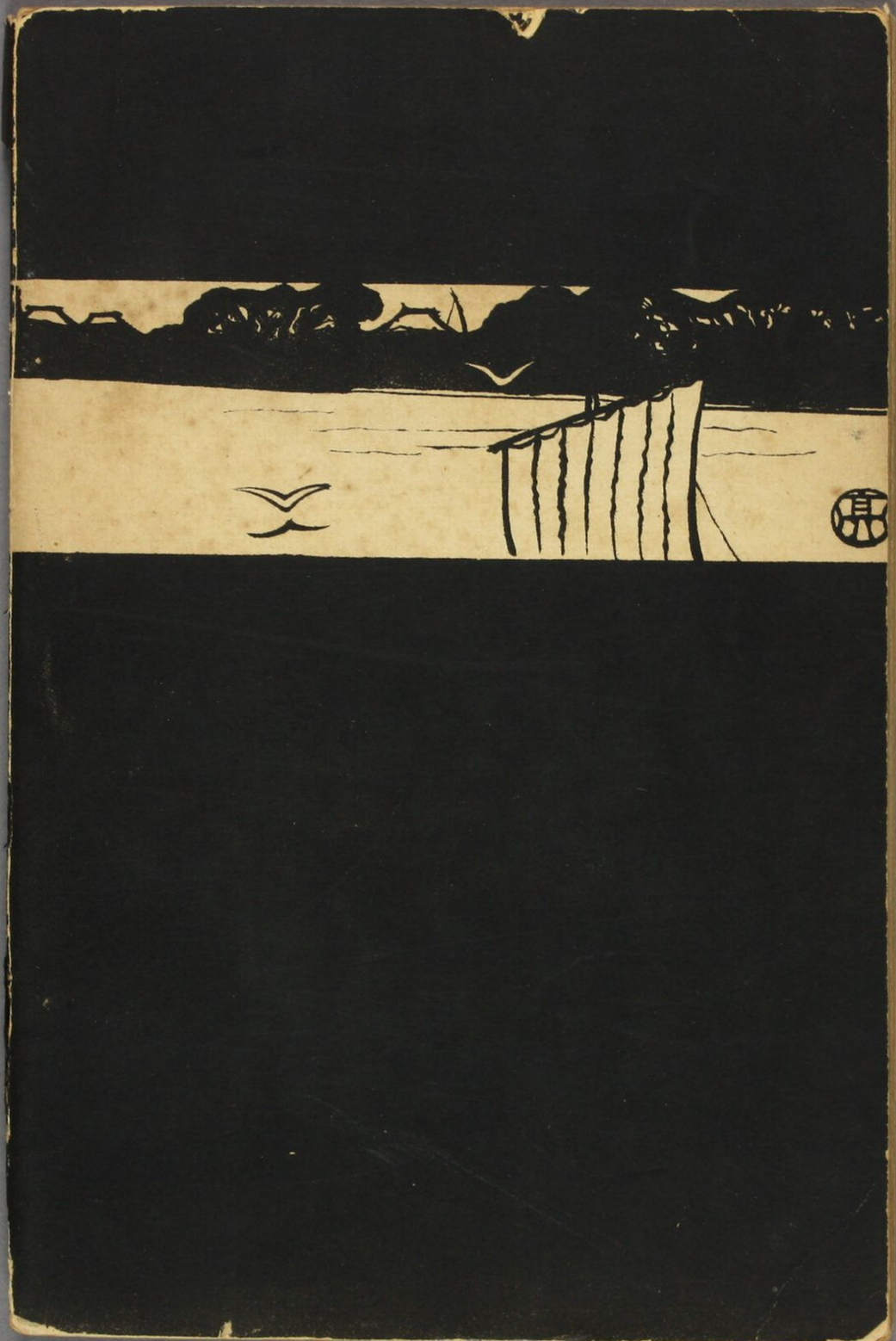
殘名

總菊子著

名殘



なごり

總南子著

吾や年少未だ造詣する所淺く野調素より聞くに堪へずと雖も今や專攻の學の故を以てしばらく文筆に背かむとすさすがに名殘の惜まれて玆に斷片一卷を綴ると云爾

明治三十四年　天長佳節の日　總南子

"The fault.....is not ni our stars,
But in ourselves that we are underlings."

——Shakespeare.

ダンテの神曲

"In the midway of this our mortal life,
I found me in a gloomy wood, astray."

CANTO 1., LINES 1—2.

Inferno.

名殘

總南子著

Minds are of celestial birth—
Make we them a heaven of earth.

末遠く雲間にさゆる大利根はしばし
とゞめむ初秋の風

霊ふくるかねもきこえて渡場に夕を
急ぐ旅人の聲

わがうたのひくきを恥ぢぬ白露の光
さへたる女神の像に
千年の高き御法を響かせて古鐘半面
月に老ひたり（夕古鐘を仰きて）

二

丁々と恨みをきざむ槌の音に悪魔よ
りくる丑みつの頃

大前に燈火やせて咀ひする白衣の少
女黒髪ながき

逍遙のわれや無心の夕まぐれ英雄墓
畔白雨急なり

三

苔の衣に老ひし譽の石の碎にわが吹
く息のあまり冷さ

色あさる大臣のゝしる童子あり都に
秋の老ひし夕に

大空をしばし燒くかと見えし野火は
かなく消えて雉子なくなり

ま心のありやなしやを疑ふな手より
手ならではうべなはぬ世に

秋霧の暗き野末にひそむ鳥何か戀し
き啼く音やせたり

乳若き齋の宮のこの夜頃分れの御櫛
折りしとぞきく

白菊に置く露くみて幸なれと友が契
りを祝ふ歌かく

望月の月の滴や染めにけむ御櫛うる
はしき枇杷殿の宮

試楽して心をこめし亂聲の響に通ふ
輦車の音

ひと夜泣き分れし去年の驛路に今我
れ來れば黒參の咲く

母思ふ窓もと近く巡禮の人やこふら
む鈴の音むせぶ

花は落ち月ほのぐらき長安の我病む
床に母は來ましぬ

永叔が窓ならなくに秋の聲天馬はい
づち今かけり行く

夕暮の窓にねよりて鳩の子に餌をや
る少女ほゝゑむ童兒

君來むと人にはいはで忍ぶれば餌を
やる鳩のむねの毛ゆらぐ

朝成の怨靈やこゝぞと忍ぶまで南殿
のうらに白萩のさく

もつれたる胸の調を野の夕精舍の壁
にしるしみるかな

戀の火の人の心に消えよかし智惠あ
りがほのさびしさやまむ

熱海雜詠

（節錄）

都をば秋のうれひに出で來しをこゝには蝶のうさもなげなる

やがて來む春やいかにと忍ばるゝ梅二千本の谷川の園

十

きけな君葩（はなびら）こゝにかみくだき富に迷ひし少女が話

十一

七歩行き十歩あゆめど答へなく太息（といき）もらしゝ人の思ひは

月白く波の端煙むる此夕二つの影はこゝに泣きけむ（以上三首友と金色夜叉を語りて）

のがれきてサツポをひらく女あり魚
見が崎の秋の夕暮

ほゝゑみて涙をはらひ立つ下に死の
手は白く深淵吼ゆる

我れ笑めば人やたのしと思ふらむ泣
く音まぎらすすべと知らずに

迷とも煩悶なりとも運命とも熱海の
秋に我れやまどへり

潮遅き夕濱邊の砂山に身を横へてう
つゝなのわれ

かくありと知らで居まさむ母君は恙
なかれと送りしものを

初島の漁火消えて丸山に月は落ちたり夜やふけぬらし

横磯の松吹く風も肌ゆるく眠りをさそふ波の音かな

顧みればあまりに心よわかりきかくての我れに無かりしものを

月黒く流星多きゆふべかな我れ湘南を明けなばさらむ

また逢はむ日をも語らでわかれたり友が眉根のはれぬ朝に

我れもまた訣別の言のいでずして手に手をふれて默してやみぬ

初島の沖より立ちし夕虹に星ほのめ
きて荒鷲のとぶ

月落ちて川波咽ぶ音寒し恨みも長く秋や
流れむ（歸途馬入川を過ぎて）

Ganz unbefleckt geneiszt sich nur das Herz—Goethe.

瓢遊微吟

一、（總南）

たづね來て興のなかばに月入りぬ主
まつとや駒の嘶く

月出でゝ墨繪に似たる森影に笛先づ
聞え童兒行くあり

名も知らぬ浦の干潟の荒磯にはかな
く暮れて潮の音をきく

ほのみえし三日月落ちて牛の聲野川
に遠く合歡の花散る

夕潮のまだのぼりこぬいその邊に海
人の新妻獨りさまよふ

あまの子とわれたゞ二人あらいそに
貝ひろひ居れば月になりける

白樫のかげも涼しき賤が家の花咲く
窓に梭の音を聞く

夢ならず遠く蛙の聲きけばあはれさ
びしき夏の夜半かな

紫の被衣まとひしわけの姫今わたる
らし朝の香高き

星淡く漁火消えて朝霧に櫓の音近く
あまかへりくる

朝潮の遠き響きを耳にして浦の苫屋
にあまの子と語る

ひぐらしのなく山里の夕暮れに泣く
兒すかして子守あぜゆく

唐うすのひゞきもたえし山里の靜け
き夜半に鈴蟲のなく

湧きかへる海苔の香高き朝じほに星
のよはひをすかし見るかな

紅の雲うつろへる夕潮に駒洗ひ居れ
ばかもめ群れ飛ぶ

鎌とりて十年むかしにかへるけふ桔
梗さく野に篠笛をきく

里人に御代のめぐみを説き居れば昔
恐びて翁なくあり

母に稚子ねぐらに鳥を人を家に收む
る頃や夕づゝのたつ

こゝもまた君が惠みの深くして夕の
煙家毎たつなり

うつし世のにごりをくみそ我が里よ
やすみにねむるなれの靜けき

曉の星をかぞふる桃川に水上慕ふ鮎
子さばしる

みなかみの花のあるじの偲ばるゝ百
合にしるせし紅筆のあと

四つの袖露分けゆけば山松の花ちり
かゝるあけの丘路

見それたる雲の行衛にたゆたへば小
さき弟武者繪書けとよ

バイロンを我れ釣床によみ居れば蟬
かしましく日蔭さし來る

日はたけて鷄の音遠く夢そゞろ何む
せぶらむ門づけの笛

興みちて烟霞を語り興つきてむしろ
をうつす椎の下蔭

夕月のほのかにてらす破れ垣による
人そゞろ夕顔の花

月入りぬ蚊やり火きえぬ人去りぬゐ
はれねよとや山寺の鐘

二十六

野狐のさだめさらでや濃く甘き葡萄
一房丘に實れる

二十七

二、（下毛）

しばらくは王者の民に眠らなむ名も
うるはしき太平の山

あさまだき磯うつなみに送られて今
宵高峰に月を見るかな

路三亭わが會心の友は來ぬ我れまづ
說かむ八州の月

月淡き太平山の黎明に若き匠の繪筆
かむ見し

今日もまたひるの暑さのしのばるゝ
朝霧深く鳴く蟬の音に

森にそひて林にそひて田にそひて白
帆三つ四つ利根うねりゆく

うらぶれてゆく旅の子の菅笠に入日
にほひて夕立の降る

行きくれて人なつかしみ立ちよりし
賤が軒端に虹をみしかな

血若き我れ二十三の旅にして夕邊野
菊に口つけてみし

自ら神恐ばるゝ山にして御法をとき
し聖かしこき

見あぐれば白雲迷ふ斷崖に天津乙女のは
こらたつかな（出流の觀音）

雲深き神の岩窟に分け入ればあまつ
御園の道かとぞ思ふ

松の音瀧の響の山にして白き被衣の
神を見しかな

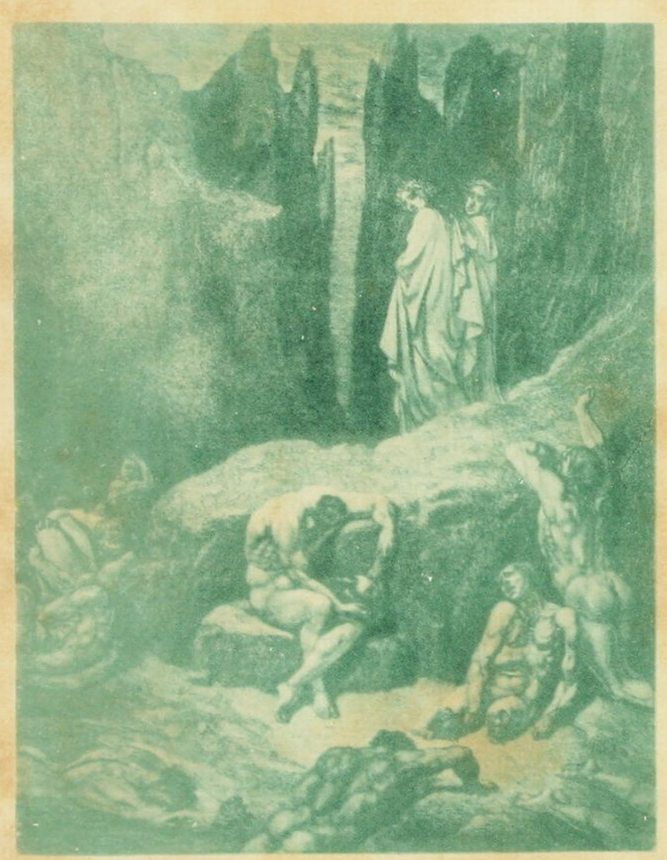
唐澤の大城(おはぎ)の跡(あと)にわれくれば古井のあたり百合の花咲く（藤原秀郷の城趾）

駒かひし昔しのばれ城跡の岩間の清水掬(すくは)びみしかな

石切りの響も絶えし深山路の雨ふる夕我れに悔ひあり

ダンテ地獄の卷

But Virgil roused me: "What yet gazest on?
Wherefore doth fasten yet thy sight below
Amongst the main'd and miserable shades?"
CANTO XXIX., LINES 4–6.
Inferno.



今はとて神の御聲をきく我れに泪を
ぬぐふやさ手罪あり

友去りて雨の日ひと日うつら〳〵鳩
のなく音に日は暮れてゆく

夫逝きし姉君とはむ秋たけて小雨そぼふる今日の夕は

今もなほ我れ木蘭の詩はずせど合せし琴による人のなき

梭の音もきこえず今宵織姫の天の河原にしのびなくらむ

これやこの我が家なりや門近く倉立つところ柿の實みのる

夕ざれば雲紫に富士黑く水鳥赤し寒川の浦

疑念は戀をほろぼす銷なれば涙にぬぐへくもりせしまに

向上の一路千聖傳へずと我れはゝゑ
めり二十三の春

平和よび手に劔とぐ人ありなこれ千
九百一年の春

物の音はいづくよりぞと窓押せば去
年の若竹雪に埋るゝ

梅薫る今宵のまとゐのざれ言は若き
が罪とゆるしませ君

春の夜のうたげのむしろたけなはに
羞に醉ひたる少女子三人

高樓の月のうたげのはてゝより欄に
よる人うたひくゝずす

つれなくて別れし人の文こしてわれ
またまどふ春のくれかな

君とはむ花の吹雪にヴィオロンの餘音
たゝよふ月の夜頃に

供眠る陣の大臣の御車に花散りかゝ
る春の夜半かな

愁に筆とることの無かりせば胸に痛
みを持たで止みなむ

ゆく春に愁ひもつ子よ立ちよりてわ
がはぐゝめる小羊抱けな

小羊の瞳にうつる星影は逝きにし人
の魂としぞみる

憂れたる胸を休めむ蔭もがな翡翠の
床や夏の夢濃き

牧場にいでゝ我が慰藉のうた聞けな
木闇の小路啜り泣く子よ

ほどへなばまぎれやせむと待ち過す
月日に添へてわりなき思ひ

蜥蜴眠り笛の音遠く日はたけぬ草に
ぬる子に神ヂスよらむ

昔忍ぶ鳴野の月の今もなほ遺に殘る
清堀の秋

鳩ねむる甍を縫ふて大内のみ空に高
き虹の七色

蜘蛛の絲を破らでかゝる白露の光ま
ばゆき夕立のあと

Das kleinste Haar wirft seinen Schatten.

——Goethe.

名殘（二篇）

一

暮れゆく秋の名殘にか
沈む日影の照りそへば
峰も谷間も紅ひに
紅葉は燃えて水清く
綠滴る常盤木に
それ青山の詩はありな。

荒城敗壘冷やかに
夕の空に突出でゝ
麓の湖に影うつし
秋清涼の氣は滿ちて
鏡に似たる水の面
浮ぶ鷗の二つ三つ
うつれるかげの色赤し。

羽蟲や厭う水鳥の
足搔きに起る漣は
黃金の色に輪波して
いつかは遠く消えてゆく。

今日の一日のはげみにて
獲たる獲物の數多く

喜悦満ちて己が家へ
歸へる獵男や吹く角笛の
谷の返響を反へしつゝ
城の麓に聞ゆなり。

巖群り蓬荒れ
鳳樓いつか跡もなく
名のみに殘る天守閣

流石に昔忍ばれて
砦をからむ蔦かづら
勇士の血にも似たるかな。

荒廢にし園も秋深く
枝もたわゝに實れども
鳥も靜にうたへども
草木に愁ひの響きあり。

なくさりゝす聲絶えて
かすかに遠く聞ゆるは
よみのさけびかなき魂の。

吊ふ人のあともなく
ざれしかうべのこゝかしこ
あゝ誰れか心をいためざる

勇士は死して名は朽ちぬ。

谷間をとざす夕霧の
あやしく迷ふ岩がねに
破れ衣まとひ面やせて
歩みもあへず倒れたる
泪に咽ぶ翁あり
落つる日影に照らされて。

道玄坂 文泉堂

＊＊＊＊＊＊

『悲風慘劇數ふれば
はや十六年をあとにして
空しく殘る老の身の
國を改復さむよしもなく

＊＊＊＊＊＊

立つよと見えし程もなく。

顛倒びて岩にとりすがり
無念のむか齒現はして
破粹の風の冷やかに
白髮ねぶり
肉落ちて
骨もあらはの頷を
傳はり落つる涙には
濡れし草葉の色赤し。

＊＊＊＊＊＊

『よる年波のひまもなく
あはれ此身も
老いはてゝ
心のうちは……もゆれども。

＊＊＊＊＊＊

壞却の風のひとしきり
軈ては土と變はるなる
城の櫓を
見つめつゝ
思ふなかばも絶え〳〵に
語り終らで日は落ちぬ。

二

花月に泣ける長袖の
うたふもやみていつしかに
弓矢とる身の手に落ちて
世は武士道の百余年。
血汐を武もて清めたる

わが日の本の武夫の
家に生れし若者が
古老一夕の懐をきゝ。

恨は長き顛滅の
國の悲劇に動かされ
紅顔うたゝ色あせて
涙日夜ほしあへず。

熟そとばしる青春の
思ひは凝りて一と筋に
とゞむるすべもあらなくて
迷ひ出づるもはかなしや。

日足短き冬の日の
いつしか暮れて夕嵐

梢に殘る二葉三葉
吹きも落さむ夕かな。

寒さは烈し風强し
人目をよけて里を出で
北に趣く若者の
旅の姿の雄々しさよ。

道玄坂 友誠堂

落葉に氷る霜冴えて
み空の星の影やどす
木の下路を過ぎ行けば
いつか坂路となりにけり。

谷の木魂に送られて
石の坂みち登りつめ
行くての空を眺むれば

北斗は高し風寒し。

思はず見かへす來し方に
若き血汐の湧きかへり
花のかばせ色深く
涙は茂し風強し。

二十三夜の鎌磨げる

道玄坂 古泉堂

刄の光身にわびて
見渡し廣き枯野の原
辿る野橋の霜寒むみ。

行くての城をみつめては
大空仰ぐかはばせは
月にや消えむ眞白にて
露の眼に光あり。

風は死したり夜や深し
削りてたてる遠方の
劔の峰は雲に入り
麓の湖は徐ろに
傾く月の影宿す。

城樓壞れ跡もなく

道玄坂 古詩堂

道玄坂 玄誠堂

殘る砦の石づゑや
古松老杉幾年の
盡きぬ恨みを嘯きて。

荒れにあれにし天守閣
慘雲軒に連なりて
幽鬼の舞ふと疑はれ
哀猿人の腸を斷つ。

まして吊ふ人もなく
月のみ獨り冷やかに
昔ながらの色にして
髑髏を照し影寒し。

嶺の狐のなきやみて
殘の月の影細く

かすかに通ふあけの風
髻舐り身にぞしむ。

思ひは九腸をめぐりて
紅涙とゞめ難く
月にそむき涙拂へば
流星北に落ちて影青し。

天霧山徑を閉ざして
まだ明けやらぬ天地は
夜の眠に被はれて
鳥獸の聲もなく
獵男も夢や醒めざらむ。

何地よりかは笛の音の
遠き響に誘はれて

道玄坂 玄海堂

長くかすかにまた遠く
呼ぶか闇浮の魂の聲。

『已矣哉桂華満兮明月輝
扶桑曉兮白日飛
玉顔滅兮螻蟻聚
碧臺空兮歌舞稀
與天道兮共盡』

莫不委骨而同歸』（李白擬恨賦）

けらく

鳩の夕に餌をあさるごと
つぶらなる眼して快樂求むる子よ
眉根若きに何ぞ寂しげなる
來りて我が膝に凭り

道玄坂 玄誠堂

葡萄の甘きを嚼めな。

逝く春の憂きに
得堪へずといふかさらば
近う我れによれな
人何のそしりぞ
乳若き我が胸に抱かむ。

堂上に人酔ふ
歡樂の響今ぞ聞ゆる
上れと我れにすゝむるか
あゝ神の御名にて汝を抱かむ
汝が手は慓へるにあらずや。

快樂は咲ける罌粟の如く
汝が手觸れなば花散らむに

道玄坂 玄誠堂

夕空を燒く北光の如く
汝が手指す間光消えむに
こゝの甘酒殿ありと知らずや。
光は香ひ花照るとはの
大空仰ぎて
人の世の夢に醒めな。

水洪大の亡滅物生
The Deluge.

道玄坂 玄誠堂

渋谷
道玄坂
玄誠堂

渋谷
道玄坂
玄誠堂

暮天の哀歌

Nessum maggior dolore,
Che ricordarsi del tempo felice
Nella miseria.

——Dante.

一

陸路はるけし海遠し
恨はつきぬ鹽竈や
秋逍遙のその一日

渋谷道玄坂 玄誠堂

忍ぶに堪へぬ今の身の
熱き涙に咽ぶかな。

二

千賀の浦曲の夕なべに
よせ來る波に風吹けば
泣きぬべらなる岸の松
汝も思ひは濱千鳥
憂ひは空に滿ちぬらし。

三

人には言はじ鴉鳥の
つれも無けれど水底に
通ふ心はあるものを
世に吹く風は荒くとも
夢路をまではとがむまじ。

四

あゝ熱き涙に潤ひて

琴柱に堪へぬ玉の緒の
彼方此方によりかけて
繰りかへしても絶えやらぬ
縁はいかに悲しきよ。

五

思ひ亂れて恙ある
身は木がくれに逃れきて
搔きやあつむる紅葉に

血汐のあとを尋ぬれば
浮世の秋の悲しさよ。

六

冷えし腕の力なく
涙の門に佇みて
樂しかりけるそのかみの
心のあとを辿らむに
誰か涙に咽ばざる。

渋谷道玄坂 玄誠堂

七

魔界の旅をしるしたる
書今こゝに抱く身の
なほ忘られでくりかへす
千賀の浦曲に神かけて
社を下りし其夕。

八

にがき誹りもほゝゑみて

よしや刃に裂かるとも
そとばし出づる血汐もて
エトナの山の火にそゝぎ
世をば燒かむと契りしか。

九

旅寢の夢の破れやすく
欸乃遠くめざむれば
粧ひなりて窓により

渋谷道玄坂 玄誠堂

渋谷道玄坂 玄誠堂

うさも忘るゝ朝景色
君起きませとはゝそみし。

十

辿る浦曲の朝霧に
口笛輕く吾吹けば
春をむけてすゝり泣く
何悲しきとよりそへば
變りし君が憔悴にと。

十一

危き岩に根をよせて
こゝちよげなる島松に
かゝりて燃ゆる蔦かづら
秋の日を燒く色ありと
細き腕によりしかな。

十二

厚き緣の長かれと

渋谷道玄坂 玄誠堂

佇む磯の大岩に
小石ひろひて戀の名を
互に列べ刻みたる
文字の深きをきそひしか。

十三

三歳の雨露に今もなほ
並びし文字は殘れども
忍ぶにつらきかたみかな

痩せし面容に色あせて
都の秋に吾や泣く。

十四

わゝ悲し夕雲の
行衛は東北の空
暮天の色の紅に
冷えし血汐の逆流て
黄金もとけむ熱ありな。

渋谷
道玄坂
玄誠堂

十五

むしろ惡魔にはふられて
たぎる血汐のつきもせば
とはの眠に吾入らむ
世に吹く風の荒くして
生くるにつらき吾身かな。

Ich kann nicht singen und springen,

Ich liege krank in Gras;

Ich höre fernes Klingen,

Mir träumt, ich weis nicht was.

——Heine.

Und Lust und Liebe sind Fittige

Zu groszem Thaten.

——Goethe.

紅の思

一、

朝雨の名殘を露にとゞめて、心も醉はむ春の日の、笑める姿のうるはしく、花咲ける葡萄の園は嫩葉をわたるあしたの神の御息に、えならぬ香りをそへぬ。

若葉けむるらむやうなる森の彼方には、班鳩の啼く音靜に、絶えては續く杣人の斧の響に通ひ、

渋谷道玄坂 玄誠堂

佐保姫の彩筆やふれけむ、里の牧場は昨日にまして色濃く、若き家畜の喜びや満ちぬらし、彼方にかけりつ此方に跳りつ。

百合や花咲く谷間の岩根より、流れ出でけむいさゝ川、春の心や流るゝ、夢の如く烟こめたる柳がもとを、静に流れゆくさゝやきは、遙に白銀の線の響を聞く思ひあり。

菜籠片手に少女が歌ふらうたき聲は、寢牛の夢を誘ひ、野邊をつたへ〳〵て遠く森に入りぬ。

大倉谷のこなたの丘に、和らかき綠の草の上、白き何やらの美しき花を紅の唇にふれて、笑みそめし紅梅を薄絹に、包みたらむやうなる面容をなしつゝ、若者の語るに耳かたむくる少女あり。

曉の星にも似たる眸の清きがうちに、生れながらの雄々しさみえて、語ふ聲も美しく、清き血潮は燃ゆれども、戀知りそめし昨日今日、はぢらふげなる面容には、さすがに幼げの殘りてゆかしくにはひやかなる笑みをたたえ、少女が肩によりそ

渋谷道玄坂 玄誠堂

渋谷道玄坂 玄誠堂

ひて、若者は、

『空も醉ひたりしにはあらずやと思はるゝ昨日けふ、まして昨夜は、月朦朧に春の夜の夢心地なるにあこがれて、きみが常々面白き翁よとの給ふ、渡守の翁がもとをたづねまゐらせしに、例のかもしろき話あまたありし後、今宵は月の入るさまで語りまさむ聞き給へかしとて、いつも君が言ひ出でゝ笑ひ給ふ、大きなるきせるうちふりつゝ、語り出でたるひとふしの物語、なにやらむ我心深く

ふどりて一夜を夢にたどり、今日やとく御身を見まはしく、あまりに早く訪れて、母君いたくもゑみ給ひぬ、さりとてあまりに戀しきものを。

かく言ひて若者はいともまじめに、溢るゝ情の思ひは、うるはしき額に表はれて見ゆるやうなり。まじろぎもせぬ面容に少女ははゝとうちゑみて、

『あはれゆかしの物語や、語り給へな君、一夜を夢にふくり給ひしとの話、きかまほしや、語り給はれな。

語り給へと言ひつゝ、若者が膝によりて見上げたるまみのらうたさは、桂の花咲くといへる野邊の、若草をふむらむ鳩に似て、さても美しき。若者は少女が膝に散りかゝりし花びらを拾ひて靜に唇にふれぬ。

『長きを厭ひ給はずば、されど君は吾に誠なきやうなり、いつもわが語るに笑み給ふよ、誠なきやうなり。

少女はおどろける面にて、

『むづかしきことの給ふよ、妾が君に誠なしとな、妾いかにせば君誠ありとの給ふにや、あまりにひどくおはさずや、いつも君が面白きことを語り給はるに、妾はたゞ嬉しとのみ思ひまゐらするものを。

と言ひて怨じ顏なるに、野の雲雀のみは、われや知るといはぬばかりに、けたゝましく啼きて空高くのぼりぬ。あはれ神のみもとにつげむとにや。

渋谷道玄坂 玄誠堂

渋谷道玄坂 玄誠堂

姿は高く青空に消えて、調は低く地に落ちぬ、耳そばだてし程もなくひゞきは絶えて、小川の流れ清く耳に入れば、二人は見るとはなしに見かはして、互に含める笑みの韻ひは、築土のもとにはぐゝめる紫草の、柔かに春の日に薫じ出でたるもなどかは及ぶべき、神の世の花とや説く夕の空の、うるはしき星の如くに、緑濃き野邊に咲き出でたる蒲公英の、傍に咲けるを摘みて若者は少女に與へぬ。心ありてにはあらぬすさみも、あまの臺(うてな)の

とばりごしに、神はいかに微笑みて見そなはすらむ。

「語り出でむ、笑ひ給ふな、……笑ひまさぬとな、さらば語り出でむ、……葡萄の紫に色づく頃、鶉の雛追ふていつも歸へるさを忘れし彼方の丘、われ見給へや、草刈が今牛追うて登りゆく、彼の丘の後にてこの青谿の湖の、北より西にめぐり〳〵て遠くつくるところ、名もうるはしき花輪の里に、今を去る四十年のころとかや、時めく長に、五陵

の年少爭うてと唐人のうたひけむやうに、たとは
〻君の如く美しき人のわりしとよ。
かざせる花の落ちしをも知らで少女はさへぎり
つゝ、
『よしなきことをの給ひそ、妾などかうるはしか
るべき、君はいつもさることの給ふよ、口わろき
人よ、妾にたとへまさずとも。
人の心の奥に深くも怨び入りたることの、折り
につけいつも浮び出づらむやうに、美しとの思ひ

は若き胸に、消ゆる時あらぬべう印象されたれば、
かくも言ひ出でたるなり。
『いなとよ、うるはしと思ひまゐらするものを、
さの給はでき丶ませな、……鶯の羽風にも觸れます
なとかしづかれ給ひしその花の君、振分髪のむか
しより、一族の男子にて一房の葡萄も分け給ひし、
睦まじの友ありしとよ、ふたつの蝶の露もらさじ
の中を、ふたりの親はよろこびて生ひたつ末をた
のしみに、下れる世の習はしにや、さりとて人の

渋谷道玄坂 玄誠堂

渋谷道玄坂 玄誠堂

道にはあらなくに、葉蔭に鳥のかくるごと、まことの愛は情ある心のかげに宿るときくものを、うたての極みや、西の都の陷落しとき、若ささすらひ人のかの里に恐びしに、ちうたけし花の君はそれに心を通はして、片科川の流は倒に流るとも、この戀や變らじと誓ひてし人の、影みるをだに厭ひませしとよ、青塚月黑く杜鵑血に啼くの夕もうつゝにさりて、牧場の端の片藪に、沈みゆく日かげを吊らひ顔になく、淋しげなる百舌鳥の聞ゆる

秋のくれつ方、敵の間者（しのび）に驚きて都の人は、落ち行く先きはいづこ、白河の關路を越えしとのみは便（たより）ありき。相見し程のまもあらで、死ぬるにまさるくるしみの、訣別にあうて明暮を涙に三とせは過せども、北より雁はかへれども、戀に泣く身の常とかよ、園生の蝶の睦びにも、雛を擁ひて巣ごもれる燕を見ても身にやしむ、いつかは姫はいたつきの床にふす身となりぬ。さても朝霧こめしわさぼらけ、里川の岸邊を角の音清く吹きすさみ、

渋谷道玄坂 玄誠堂

よべのねむりをさましつゝ、牧場に通ふ童子の、叢わけてゆきし時長の愛子は息たえて、ふきそふ霜に黒髪をかどろに亂しはかなくも、……あはれ片科川の水は長へにさりて歸らず。さるにても君、偽りの世は今もなほ變らねども、すさまじきものはこひなりな。振分髪のかの友は、契りし人のまさならもいまはしきさがあらはせるにもかゝはらず、嵐吹き雨降るあした夕のへだてなく、姫が眠れる墳塋にかざれる花の、あへしことは何時も無

りきといふ。如何に浮世をみたりけむ、むかふる妻もなくて牛飼ふすべを業に、里をはなれて庵して春の夕に秋の暮、戀に泣く身のあはれそへ、昔語となりしとよ。想へば、偽りをもて滿たされたる世やいつまでか續くらむ、幾百千年のむかしにありてうた人は世を罵りぬ、時の流れは極りなし、偽りやとこしなへにやむ時なからむか。

語り終りて若者はうらみ綿々として盡きざるものゝ如く、濕へる眼に打ち霞みたる日蔭を仰ぎ、

渋谷道玄坂 玄誠堂

言ひしらぬ思ひにうたれたらむやうなり。少女は心やいたく動きけむ、若者の膝によれる手はすくなからずふるへぬ。楡の老木の枝には青鳥の雛うれしげに羽ばたきして、日毎にはねの力まさるをほこりがはなり。あえかなる櫻草白樫のかすけきにほひ、柔かき春の氣の浮動するにつれて響き來る蜜蜂のなく音、無聲にまさるさびなれや。

三、

少女は深くうち沈みて、わるかなきかに、

『いかなる魔風ふきにけむ、いかなればかゝるやさしき情をすてゝ、うつろひし人の心のうたてさよ、あはれ神の御園をとざゝれて、ゆくへも知らず門の邊に迷ふらむに。

かく言ひて俯ける少女が、やさしき想像のみちは、神が歩めとて人の爲めに造れる、迷はしの鳥のうたはざる、名も知らぬ花の咲かざる、いまはしき蛇の居らざる、直くしてうるはしの道なり。若者は、かみかけて契りし人のかくてもあらむに

渋谷道玄坂 玄誠堂

は、自ら死にたらむかた、遙にまされりと思ふらむやうに、少女が思ひの、燃ゆるが如き惱みの宿れる己が胸に、得觸れむことを深くも願へるなり。しのいめ遠く聞えて、春の思ひやのせくる朝の潮の如く、湧きかへり湧きかへる思ひの怒ぶにくるしく、谷の小百合の白露くみて、染めてみましの少女がをりあしのあたり、二筋三筋散りかゝれる後れ髪をかきあげむともせず、たゞ柔かき指先にふれつゝ、遺にそれと言ひも出でかね、日毎親し

く交るにも拘らず、かくむかひゐては、今更に心あらたまりて物新しき心地せられ、やうく思ひ定めたらむやうに、されど美しき聲の例に似でふるへがちに、

『君こふる人ありて、花てふ花の咲く野邊と、色なつかしき若草の野邊をつくしてわたへむと、言ひよる人のありもせば、君いかにしたまふ。』と言ひて熱にふるへ、握れる手は寛かならず。

をとめ心のしかすがに、さすが心にはづかしく、

渋谷道玄坂 玄誠堂

神もやどらむ乳色の頰に紅うすく染めなして、問ひよる袖をやさしげに心を輕くかへしつゝ、

『さの給へどきみ、花は凋まむ時のあり、草は枯れなむ時のあり。

頭は俛れて伏目がちに、そこともしらずむづかしき思ひに耽りたらむやうなり。されど若者は偲ぶ思ひの穗に出でゝ、

『この世のむくろうせし後、魂魄(たま)のきえざるそのかぎり、心も身をも賓をもさゝげて君を戀ふ人の、

眞に君を戀ふ人の、こゝにありせばいかに君。

『ゆるしませな、くるしさよ、君がみかはのふもはゆくて。

若者は紅の色そひて、ひとしほまさる、花のかもわをのぞきつゝ、

『櫻が岡のあたりにて、夕暮毎にわが歌ふ、うたの心を君やしる。

いかで知らでやと言ひて見あげたるらうたさは、宜なるかな、かゝるうつしよならぬ美なればこそ、

九年の長き間この世界を戰の中に陷れたるなれ、あはれ貴くも心ゆくばかりなる姿かなと、そのかみトロヤの古老をして嘆ぜしめたるヘレナの美も、いかでこの上に出ることやあるべきと思はるゝばかりにて、美しといふも愚なり。

『入日の影は雲にのみ殘りて、百鳥のなく音をさまり、松風のみ清く吹きわはす夕、涼しき御聲に歌ひ給ふ、うたの調の貴さには、里の翁もうつゝの夢に泣きまどひ、心なき賤の女も、いそがはし

き心も手をもしばしとゞめて、耳かたむけまゐらするなり、君がみうたの聞ゆる時は、妾が母はいつもひとわろく妾をみかへり給ふよ、みうたの調はいつも妾がうへなれば、撰み給ひしなさけのうれしさに……君が訪れ給はぬ日は、君が御聲もや聞ゆると、夕暮の戸によりて耳かたむけ、なつかしさに時を忘れて、呼び入れらるゝがつねなり、さるを、まてども〳〵御聲はなくて、はかなく消えし夕雲を、うらみまゐらすることもあり、君な

渋谷道玄坂 玄誠堂

つかしきあまりに。

『わがひとひらの歌もみな、君が姿のこもらでやあるべき、君なくては一片のうたも、わが口にはいでざるものを。

草は益々緑に、花はます〳〵紅なり。

四、

鶏の音遠く日はたけて、草木も眠り牧童の笛もいつしか絶え〳〵に、眞晝の靜けさひとしほまさるに、さむるは何の神ならむ、若者の思ひはいや

まさりて、

『燃ゆるを覺えしめしは美しき君なり、身も心をも捧げまつりし吾なれば、缺くるになれし言の葉の、あふるゝ思ひを君に明かさむよしもなく、あゝいかに明かさむわが思ひ。

もゆる心のそこひより溢れいでたる言の葉の、少女が小さき胸の緒琴にはいかにふれけむ。

『君がうれしき言の葉に、妾が胸は、かくまでになみたつことのはげしさよ。

渋谷道玄坂 玄誠堂

渋谷道玄坂 玄誠堂

と言ひて、少女は若者が手を己が胸にそへて、しばし言ひ知らぬ思ひにくれたらむやうなり。軈てかすかに少女が唇をもるゝは、

『忘るなとて君が母様の、妾にきかせ給ひしみことばは、夢の間も忘れまさぬものを、さることのたまはでもよからずや、妾のつたなきはゆるしませな。

誠なりやと言ひて若者は心も身をもうち忘れ、物狂はしき如くなり。

あまりにくるしくてと言ひつゝ、少女はこぼるゝばかりに笑みぬ。若者が耳に菫のひと片をはさみ、かろく腕にふれて、小川のほとり若草に跳る、小羊のひと群を指し、

『ゆるしませな、あれみたまへや、君が様をかしとて笑へるにあらずや。

五、

たのしき春のうたをきゝ、うれしき春の香に醉ひて、誰れか心の底深くよする血潮を覺えざるも

渋谷道玄坂 玄誠堂

のぞ、喜びや望みやもち月の圓かなる、青春の夢
薇ふ爛熟の櫻花、ゆく春をとゞめかねたる夕暮に、
ほろ〳〵と散りゆく哀艶の名殘、花の心やいかな
らむ、また來む年のありとても、花に恨みのなか
らじや、梢はなれて散る花を追ひゆく蝶のをかし
さよ。

花の蕚の白露の如く、清くらうたきなさけにそ
ぼちつゝ、二人の若きこひ人は、物とはなしに沈
みゆく日陰を見入りて、思ひや何所をたどるらむ。

風にうたひし雛草も搖ぎをやめて、青谿の湖上
夕の霞、たとはゞ乳房にもたれつゝやどす、無邪
氣なる夢の如く、戀や恨や歌や涙を照らす落日の
かげは、さながら光の粉をまき散らしたるが如く、
野邊に山邊にてりそひて遠くは雪山のいたゞきを
あらはし、今迄見えざりし森の木蔭も、梢に宿る
やま鳩の安けく眠る其樣も隈なくてらし、高き丘
に介立する牧夫を照らしては、天の靈光に沐浴す
る何やらの神の如くに、その丘は半は黄金の舘の

渋谷道玄坂 玄誠堂

如くなり、漸くにして紫雲の殿となり、又暫時にして琉璃の宮となりぬ。樺はその馨香のうちに涕を垂れ、白楊は和らぎのもとに眠りぬ。

森のあらしの音絶えて、祭の庭に笑ひさゞめく里人の聲は、遠里小野になく犬の音と共に、折り〳〵風につたわり、夢よりも幽に遠く聞えぬ。

里の細道ふみわけて旅人の、いづちゆくらむ、歩みも鈍くたど〳〵と、夕日を負ひて月待の丘の東にゆくもあり。

紫香ふ丘のべに、紅埋む夕霞、愛の御神のまな子つゝめる中を、百合かはる風ゆるく、散るとはなしにちる花を浮べて、夕の思ひを吹きわたりぬ。

さても静けき有情の夕まぐれかな。

入相の鐘の音に、里は再び眠れる如き静けさよりさめて、ねぐらにいそぐ夕鳥の聲、牧場に家畜をあつむる角の音もきこえぬ。少女はいづくとも なき牧童の笛の音に、しらべあはする若者の口ずさみを、をかしとてはゝえみながら聞きぬ。

若者はあすをちぎりつゝ、をとめが手をとりて、
『里に煙のみえそめて、鈴の音近く聞ゆなり、い
ざや歸へらむわが君よ。
共にむつびて夕暮の、うたをうたひて歸へるさ
に、少女はかるくさゝやきぬ。
『忘れ給ふなかのことを。
この夕虹の環かゝる野邊の雲雀は、芳しき若草
の床に、新妻とはゝをみながら少女がさゝやきを
くりかへしぬ。

なごり

畢

渋谷道玄坂 玄誠堂

渋谷道玄坂 玄誠堂

明治三十四年十一月廿二日印刷
明治三十四年十一月廿五日發行
明治三十五年十月七日再版

（名殘奥附）
定價金三十錢

著者 東京市京橋區南紺屋町十八番地 中山亮二

發行者 東京市京橋區住吉町貳番地 小川寅松

發行者 東京市京橋區元數寄屋町四丁目二番地 加島虎吉

印刷所 福岡印刷部

不許複製

發賣所

東京市京橋區南紺屋町十八番地 尚榮堂書店

東京市日本橋區住吉町貳番地 至誠堂

渋谷
道玄坂
玄誠堂

渋谷
道玄坂
玄誠堂

なでり正誤

紙數	行數	誤	正
二	四	さへ	さえ
二	六	老ひ	老い
二	六	仰き	仰ぎ
四	一	老ひ	老い
四	四	老ひ	老い
八	一	永叔	永叔
一七	一	瓢遊	漂遊
二二	四	篠笛	篠笛
二九	五	菅笠	菅笠
三八	四	たゝよふ	たゞよふ
四二	一	緑	絲
四三	五	紅ひ	紅ゐ
四五	一	厭う	厭ふ
四五	六	獲	獲
四五	六	獲物	獲物
四七	一	流石	流石

紙數	行數	誤	正
四七	三	勇士	勇士
四九	二	夕霧	夕霧
五一	一	顚倒	顚倒
五一	一	岩	岩
五四	二	長う袖	長袖
五四	五	武士道	武士道
五五	三	懷い	懷い
五五	四	恨み	恨み
五六	六	夕嵐	夕嵐
五八	一	落葉	落葉
六一	五	影	影
六六	四	飛ブヲトロヱテ	飛ブオトロヘテ
六六	五	滅	滅
七四	四	緣	緣
七七	二	そとばし	ほとばし